



Title	非戦論と軍人へのシンパシー：内村鑑三の軍人観
Author(s)	石川, 明人
Citation	基督教學, 47, 33-57
Issue Date	2012-07-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/50533
Type	journal article
File Information	SC47_003.pdf



非戦論と軍人へのシンパシー

―内村鑑三の軍人観―

石川 明 人

「イエスは平和の君であるが、その部下として忠実なる軍人を求めたもう。
そして軍人が福音の戦士と化せし時に、最も有力なる平和の使者となるので
ある」

内村鑑三「軍人の信仰」より⁽¹⁾

一 はじめに

内村鑑三の「非戦論」はすでに人々によく知られている。彼は日清戦争は義戦として肯定したものの、それ以後は戦争に全面的に反対し、最後まで非戦論を唱えつづけた。その一連の議論の詳細については批判的分析もあるものの、基本的には、日本におけるキリスト教的平和論の嚆矢として高く評価されている。

だが内村は、非戦論への転向後も、「軍人」そのものについては必ずしも否定的ではなく、むしろ彼らを肯定的に評価する発言も多く残している。管見の限り、これまでの内村の非戦論に関する研究ではそうした点について注目されることはほとんどなかったようである。本稿では戦争や平和について再考するための糸口として、内村の軍人観

について考察することにした。

以下では、まず内村の非戦論の要点を確認する。その次に彼の実生活における軍人との交流などについて見た上で、軍人という職業および軍人と信仰の関係についてどのように考えられていたのかを整理、分析していくことにしたい。

二 内村鑑三の戦争観

内村の非戦論や平和思想についてはすでに多くの論考があるので、ここではその要点のみを簡単に整理することにした。彼が戦争について論じる際のまず一つ目の角度は、現実的ないし合理的な次元から戦争廃止の必然を主張するものである。そしてもう一つは、信仰的次元、特にキリスト再臨信仰に基づいて戦争への反対を唱えるものである。前者から見ていこう。

日清戦争直後から公にされはじめた内村の初期の非戦論は、キリスト教信仰を根底におきつつも、どちらかといえば人間の努力や道徳性、あるいは文明の進歩という点から戦争廃止の必然を主張することに重点が置かれたものであった。例えば内村は、自分はいかなる理由をもつても戦争を非とするのだと強調しているが、その理由を「戦争という手段によって、目的という目的は達せられた例がない」⁽³⁾からだとしている。彼は次のように述べている。

「日清戦争の結果は何ものをもたらしたか。日露戦争は何を生んだか。与えようとした独立は朝鮮に与えられなかった。東洋の局面は一層錯雑して来た。つまり戦争によってはいかなる目的も達せられぬ⁽⁴⁾ということを、過去二十年の歴史が教える」

クラウゼヴィッツは『戦争論』のなかで、「戦争とは、外交とは異なる手段をもつてする政策の延長に他ならない」

と述べたのは有名である。毛沢東も「戦争とは流血をとまなう政治であり、政治とは流血をとまなわない戦争である」と述べたが、内村も当初はそれに近い、何らかの目的達成のための手段として戦争を捉える見方をもっていたようである。戦争とは望ましい社会の状態を構築するためのやむを得ない手段であるという認識が前提としてあったからこそ、彼は日清戦争を支持した。そしてその結果を目にした後に、実際の戦争においては意図していた目的は達成されないということに絶望を感じたのである。「戦争は人を殺すことである。そうして人を殺すことは大罪悪である。そうして大罪悪を犯して、個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない」という発言も、ここでは素朴にヒューマニズムや道徳的な観点からのものであるように思われる。確かに道徳的観点から戦争を否定することそれ自体は間違ではない。しかしこれまで多くの戦いは、平和のため、正義のため、愛する国や民族や仲間を守るため、などと称して、あるいはそう信じて、おこなわれてきた。広い意味での人間的道徳は、皮肉にも、戦争廃絶よりむしろ戦争の正当化に役立ってきたというのが現実であろう。だが内村は一九〇四年には、戦争は今や道徳問題ではなく実益問題であるとも述べている。

「近ごろスベンサー流の哲学者によつて唱えられつあるところを聞きますれば、戦争はその目的のいかに高尚なるにかかわらず、これを達し得るものでない、ゆえに、これをやめるに若（し）かずとのことであります。彼らはすなわち、戦争は不道徳なるのみならず、不要であるゆえに、これをやめるのが第一の知恵であると唱えつつあるのであります。そうしてこの種の学者は今や過去の歴史を採り、その中に彼らの提説の証明を尋ねつつあります。そうしてわたしの見るところによりますれば、彼らのこの提説は、歴史的事実をもつて、りっぱに証明されつつあると思います」⁽⁶⁾

内村によれば人類が進歩するにしたがって戦争の害はますます増し、その益は減じていく。よって戦争には勝つても負けても大きな損害を被るようになり、やがて人々はいやでも戦争をやめるようになるのだという。内村は、「戦争はその代価を償わず、その目的を達せざるに至ります」と言う。⁽⁷⁾だがそもそも戦争は、必ずしも費用対効果だけで開始・遂行されるものではない。戦争研究者のマーティン・ファン・クレフェルトやジョン・キーガンが、文化や伝統、あるいは人間の感情や信念などの側面から戦争と軍事について考察したように、戦争は経済的合理性や政治的論理のみによつて貫かれているわけではなく、「代価」や「目的」という点のみで理解できるものではない。「不要だから」「目的を達せられないから」というだけで戦争がなくなると予測するのは、人類の戦争史から見ても現実的ではなく、むしろあまりに楽観的だと言わざるをえない。

『内村鑑三信仰著作全集』などを編集した山本泰次郎は、一連の議論のなかにある内村の非戦論には「悲哀と矛盾」が伴っていると指摘している。山本のいう「悲哀」とは、人類の進歩と世界の進歩発展によつて戦争は必ずなくなるといふ内村の考えに關してであり、それは山本によれば「人類の実情とも世界の現実とも、全く一致しない見方」で、「非聖書的、非歴史的、非人類的」なのである。⁽⁸⁾そしてさらに山本は、内村が非戦論の実践にあたつて知人の青年に戦費となる税金の支払いや徴兵に應じるよう教えたことなどを挙げ、それも「キリストの教えと聖書の教えとに忠実であろうとすれば、非戦論の実践に当たつて、このような態度をとらざるを得なくなるのはけだし当然のこと」であるが、ここに「悲哀」に加えて「矛盾」が生まれたのだという。⁽⁹⁾だが、およそ第一次大戦が始まつて少ししてから、こうした「悲哀と矛盾」をもつた内村の非戦論は、戦争は人の手によつてはやまない、という戦争観へと変わっていく。それがすなわち「キリストの再来によつて臨む神の国を信じる平和論」であり、山本はここにそれまでの非戦論に伴つていた「悲哀と矛盾」がようやく解決されたといふのである。⁽¹⁰⁾

内村の非戦論は、およそ一九一四年ごろを境に、キリスト再臨信仰に基づいた、より宗教色の強い非戦論へと変化

していく。キリスト再臨信仰に基づいた非戦論で注目すべき点は、非戦を唱えることそれ自体に平和実現の実践的な意味があるとは考えられていないというところである。例えば内村は次のように述べている。

「非戦はすべての場合において唱うべきである。されども戦争は非戦により、やまないものである。われらが非戦を唱うるは、これによつて戦争がやまると信ずるからではない。聖書の明白に教うところに従えば、戦争は人の力によつては、やまらべきものではない。戦争は、世界の世論が非戦に傾いた時にやむのではない。また、かかる時は決して来たらないのである。戦争は神の大能の実現によつて、やむのである。戦争廃止は、神がご自身の御手に保留したもう事業である」¹¹⁾

内村は自分や他の人々が非戦を唱えることによつて実際に戦争がなくなるとは考えていない。戦争廃止は人間の手によつてなされるのではなく、あくまで神の手によつてなされることだからである。同様の主張は他にも多く見られる。

「平和は来たる。されども人によつては来たらない。神の定めたまいし平和の君によりて来たる。彼が再び世に臨(きた)りたもう時に来たる。彼を待たず、彼をあがめずして、いかなる平和会議も失敗に終わるは明らかである。(中略) 民本主義の普及によつて、世界改造、人類平和を計るがとき、迷妄(めいもう)これより大なるはなし。そうして事實は聖書の明示を証明して余りあるのである。民主々義の米国の主唱によりて成りし国際連盟は、世界人類の幸福を増さずして、かえつてこれをこぼちつつある」¹²⁾

もはや内村は、人間の手による平和構築の努力は無意味であるとさえ考えているようである。「戦争は、罪のこの世にありては避けがたき悪事であります。これ、人がいくら努力しても、やめることのできないことであります。平和協会をいくつ設けようが、カーネギーのような大慈善家がありて、その億万の富をなげうちて、その廃止を努めようが、戦争は依然としておこなわれます」⁽¹³⁾。内村はこのようにも述べ、戦争の廃止と平和の実現はあくまで神の事業であり、キリストの再臨を待つて初めて世におこなわれるのだとしている。では、人の手によって平和が実現することがないならば、それにもかかわらず非戦を唱え続けるのはなぜなのだろうか。それに対する内村の回答は簡潔である。

「信者が非戦を唱うるは、現世において非戦のおこなわるべきを予期するからではない。その、神の好みたもうところなるを信ずるからである。(中略) 不義はこれを断ち得るも断ち得ざるも、いかなる場合においても反対すべきである。もし廃滅を期するにあらざれば反対すべからずと言うならば、世の罪惡にしてわれらの反対すべきものは一つとしてないのである。神の聖意にかなう事はこれをなし、かなわざる事はこれをなさないのである。そうして戦争はすべての罪惡を総括したるものである。罪惡これ戦争なりと言うも、少しも過言でないのである。神を愛する者は、その本性として戦争をきらうのである。なにも聖書のこの章かの節を引証する必要はないのである。彼の全身全霊は即決的に戦争を排斥するのである」⁽¹⁴⁾

内村はこれと同じ文章のなかで次のようにも述べている。「やむ、やまないの問題ではない。正か不正かの問題である。そうして戦争は不正である。不義である。罪惡の絶頂である。ゆえに非戦を唱うのである」⁽¹⁵⁾。平和構築に向けての実践的な効果があるから主張するのではなく、それが神の前に正しいから主張するに他ならない。彼によれ

ば、平和會議をいくら重ねても、狼と小羊が共に宿り、豹と仔山羊が共に伏し、雌牛と熊が食物を共にする（イザヤ書十一章）時は来ないだろうという。

第一次大戦当時、しばしばそれは、「全ての戦争を終わらせるための戦争」という言い方がなされた。内村はそうした考え方にはもちろん否定的である。だが同時に、人間同士の話し合い（外交）や、また教会の力さえも平和実現には無力であると考えている。「平和は戦争によりて来たらず、外交によりて来たらず、教会によりて来たらず」、「世界の平和はいかにして来るか。人類の努力によりて来たらず、キリストの再来によりて来たる」⁽¹⁶⁾のである。

こうした信仰に基づいた見方は、目の前の具体的な武力衝突だけでなく、この世のありようを象徴的に「戦争」と捉える視点にも繋がっている。例えば、「なにも戦争は今日に限りてあるものではありません。神を離れたるこの世はつねに戦争状態においてあるのであります」⁽¹⁷⁾といった言い方や、「戦争は始まるかも知れない、始まらないかもしれない。しかし、戦争はすでに始まっている。今始まったのではない。カインがアベルを殺した時に始まったのである」⁽¹⁸⁾という表現などがそれに該当する。ここでいう「戦争」は日露戦争や第一次大戦など実際の武力衝突のことではなく、この人間世界につきまとう本来的な罪や悪の象徴的表現である。だがこのような言い方は、現実の戦争が人の力によって決してやむことがないという認識が信仰的な確信であることをあらためて示唆している。内村は人間の営み、ないしは社会的事象としての戦争の分析からこのような非戦論に至ったというよりは、むしろキリスト再臨信仰を得た結果としてこのような戦争観をもつようになったというべきであろう。したがって、日清戦争直後からの非戦論と後の再臨信仰に基づいた非戦論は、戦争に反対するという点では共通しているが、その内実において両者のあいだには断絶がある。ただし内村のなかで二つの見方は、ある時期を境に明確に一方からもう一方へ完全移行したというわけでもない。例えば一九〇八年八月の『聖書之研究』に掲載された「非戦論の原理」などでは、この二種類の主張が混在した議論がなされている。だが大まかには、先に述べたように、第一次大戦が始まったところから（一九一四年）キ

リスト再臨信仰に基づく非戦論へ重点が移ったと捉えておいてよいであろう。⁽¹⁹⁾

三 軍人と内村との交流

では次に、このような戦争観、非戦論を念頭に、内村の軍人に対する接し方や考えを見ていくことにしたい。彼は非戦論を唱えるなかで、実生活では軍人たちとしばしば親しい交わりをもっていたのである。まず挙げられるのは、「陸海軍人伝道義会」との交流である。

陸海軍人伝道義会は、軍人への伝道を目的として一八九九年に横須賀にひらかれた。設立したのはアメリカ出身の超教派の宣教師エステラ・フィンチと、横須賀日本基督教会牧師の黒田惟信である。二四歳で来日したフィンチは、伝道活動が思うようにいかず、一度は帰国を考えるようになるが、たまたま伝道旅行中の黒田と知り合い、海軍の街横須賀で生活していた彼の「軍人には軍人の伝道が必要である」という持論をうけて、両者で軍人伝道をおこなうことを決心するにいたった。会長はフィンチ、主任に黒田惟信が就任した。この伝道義会は、「日本帝国陸海軍人並ニソノ家族内ニ福音主義ト基督教ヲ宣布スル」を目的とした。「信仰ヲ告白シ、会ノ目的ヲ賛助スル志アル者」を会員と認め、「外国ニ於ケル団体マタハ日本ニ於ケル宗教団体若クハ営利ヲ目的トスル団体ト法律上何等関係ナシ」とするものであった。⁽²⁰⁾ フィンチは一九〇九年に日本に帰化し、名前を「星田光代」と改めた。彼女は伝道義会を設立して以来、黒田牧師から日本史について多くを学び、また史跡や御陵をたずね、また俳句にも興味をもち、書道の腕も見事なものになった。さらに仏教者とも親しく交わり、日本と日本人を非常によく理解したという。⁽²¹⁾

内村の星田に対する信頼は非常にあついたので、星田と内村両者のグループによる会合なども開かれていた。内村の目から見て星田は「理想的宣教師」⁽²²⁾だったのである。内村が初めて伝道義会を訪れた時期は不明だが、一九〇五年六月一六日にはすでに、彼が親しくしていた軍人に宛てて書いた手紙に星田の名前が見られる。⁽²³⁾

『内村鑑三信仰著作全集』第二五巻の索引にも「星田光代（ホシダ、ホシダの小母さん、フィンチ）」という項目があり、内村の日記のなかに彼女に関する言及が一四箇所あることが示されている。例えば一九一八年二月二三日に内村は次のように書いている。

「昨夜、横須賀伝道義会に來たり、一泊す。ミス・ホシダほか一同、歓待至らざるなし。一年に一回または二回、ここに來たり、相互の信仰によりて、相ともに慰めまた慰めらる。過去一七年間、この歡喜（よろこび）は連続して今日に至った。余にまた余の団体以外に聖き交際（まじわり）のあることを、多くの人は知らないであろう」⁽²⁴⁾

その翌年、一九一九年にも内村は星田を訪ねており、次のように書いている。

「待ち受けし校正刷り來らず、よつて横須賀に行き、ホシダの伯母（おば）さんの病氣を見舞うた。歸化せる彼女の熱烈なる愛国心（わが日本国に對する）に驚いた。彼女を慰むるよりは、かえつて大いに慰められて歸った。米国宣教師中、まれには彼女のごとき潔士、烈婦がある。われら日本人たる者、彼らに對し、深き尊敬と感謝とを表せざるを得ない」⁽²⁵⁾

宣教師嫌いとして有名な内村であるが、日記のなかのいずれの箇所においても、彼は星田光代については一貫して肯定的で、彼女のことを「敬うべき主の清き使女」⁽²⁶⁾とさえ述べている箇所もある。星田が亡くなったという知らせを聞いたとき（一九二四年）の日記には「ホシダの小母さんの永眠を聞いて非常に悲しんだ。日本に歸化せる米国婦人であつて、過去数十年間、親しき友誼（ゆうぎ）を交うることができ、益するところ多大であつた。彼女は日本を強

く愛せし米国人の一人であつた」⁽²⁷⁾と書いている。

内村と星田との関係を論じた防衛大学の田中浩司によれば、内村が星田を敬愛した理由は、彼女が教派の拡大などは一切意図せず、ただ日本と日本人を愛し、その宣教が真摯な異文化コミュニケーションの上に成立していたことに集約されるという⁽²⁸⁾。また堤健男によれば、フィンチはもとと超教派の宣教師であり、伝道義会は普通の教会とはやや趣を異にして、「日本武士道的キリスト教主義の聖書研究会」であつたともいわれている⁽²⁹⁾。この伝道義会の建物には柔剣道場も設けられており、武道が奨励されていたことも大きな特徴であつた。そうした点も「武士道」にキリスト教を接ぎ木しようとした内村の考えに合致するものであつたかもしれない。ただしこうした彼女の傾向は、内村の影響でそうなつたというのではなく、それ以前に、星田本人の資質に加え、共に伝道義会を設立し運営していた黒田牧師の影響も大きかつたようである。

いずれにしても、もし内村が戦争に反対するあまり、軍人という存在そのものを平和の敵として全否定する立場をとっていたとしたならば、陸海軍人伝道義会に集う軍人たち、および彼らを指導していた宣教師たちと親しい関係を築くことなどありえなかつたはずである。内村はこの伝道義会に來ている軍人のなかに、宗教界や文学者のなかには見られないような優れた人物が多くいることに驚いてもいる。そして同時に、こうした有為の人物が争闘事業（戦争）に集中して、平和の事業が「くず」の手に託されることは残念であると言ひ、これが「国をほろぼすも」であろうかとも述べている。それだけ伝道義会の軍人たちを高く評価していたのである。この伝道義会は横須賀にあつたため、集まっていた者は海軍機関学校の生徒が多かつた。つまり職業軍人であり、徴兵された一般市民ではない。

さらに別の日記にも軍人との交流や軍人の信仰に関する記述をいくつかみることができる。一九一九年六月には内村のもとに海軍の清川・高橋両大佐が訪問し、互いに多くを語り合つたという記述が残されている。そこでは次のように述べられている。

「国に陸海軍の必要ある以上（そうして罪のこの世の続くかぎり、その全廃せらるる時の来たるを考えることができる）、その真（まこと）の信仰によって潔（きよ）めらるるの必要あるは言うまでもない。信仰の、陸海軍に必要なものは、政治、実業その他の業務において必要になると、少しも異ならない」⁽³¹⁾

内村は陸海軍という組織にも信仰が必要だと明言している。戦争は否定されるべきだが、現実問題として軍隊・軍人が存在している以上、それが信仰によって清められる必要があるのは「言うまでもない」のである。軍人が戦闘の主体であるからといって、軍人が信仰をもつことがおかしいといった発想は、彼には全くないのである。

二〇一一年三月の東日本大震災では自衛官約一〇万名が被災地に派遣されたが、一九二三年九月の関東大震災の時も多く、陸軍兵士が対応にあたった。その大震災の時、内村は今井館聖書講堂を、警衛のために上京した仙台第二師団第二九連隊第三中隊第二小隊の営所として提供している。それについて彼は「この際、最も適當の使用法と信じて、うれしかった。平和の福音を説く所に銃剣の憂々（かつかつ）たる音を聞くは、今度が初めてである」と述べている。⁽³²⁾そしてこの陸軍兵士たちは約半月ほど今井館に滞在して同月の二二日に去ったが、その時の日記には次のように書いている。

「彼らに対し、厚き感謝なきあたわずである。民に平安を与えうるための軍隊であると思えば、敬せざるべからず、愛せざるべからずである。われらの、彼らを憐（ねが）うの、はなはだ薄かりしを憾（うら）む」⁽³³⁾

さらにその五年後の一九二八年にも、内村は自宅に陸軍兵士たちを宿泊させている。観兵式参加のために上京し

た第一師団横須賀重砲兵五名を引き受けることになったのである。「全家拳（こぞ）って彼らを歓迎することに成り、はなはだ愉快である。武士の家に武士を迎うのであって、こんな楽しいことはない」、「花は桜、人は武士、非戦論は別として、武士相見互（あいみたが）いの情は実にうるわしいものである」と日記には書かれている。約一週間後に彼らは帰隊したが、その日に内村は次のように記している。

「一週間わが家に宿泊せし重砲連隊付き兵士五人、今日引き上げて帰隊し、家は急に寂しくなった。彼らはいずれも静肅なる愛すべき青年であつた。日本陸軍の誇りとするに足る兵士であつた。かかる人たちをわが家に迎うるを得て大なる喜びであつた」⁽³⁵⁾

ここで内村はさらに「われらは軍人と成るべきであつた。宗教家として牧師、神学者らに批評せらるゝとは、なんと深いことであろう。日本武士が最もきらう者は寺院と教会、坊主と牧師である」とまで付け加えているのも興味深い。

以上のように、内村は軍人に対しては敵対的であるどころか、むしろ実に暖かく接していたのである。そして忘れてはならないのは、このように陸海軍人伝道義会と交わり、星田と親密な関係をもち、また個人的にもさまざまな軍人を受け入れ彼らとの交流を楽しんでいた期間も、非戦論を唱えていた時期とまったく合致しているということである。

四 「最も善き戦士」としての非戦論者

では次に、内村による軍人への具体的な言及について見ていきたい。

ロシアとの戦いははじまっていた一九〇四年二月二日、当時軍艦「葛城」で任務に就いていた太田十三男宛てに、内村は次のような手紙を書いている。この太田十三男は内村に「長い間の信仰の友⁽³⁷⁾」と言われている陸海軍人伝道義会のメンバーで、一九二五年には階級は大佐、第二艦隊機関総長にもなった人物である。

「戦争は悪事なるに相違なけれども、今の罪惡の社会に在ては避くべからざること乎とも在候。此時に方て、我等は可成く静肅にして、且つ謹慎なる態度を取り、尽すべき職務を忠実に取り、余は之を神意に任かすべきことと在候。

樂しき国は彼所にあり、此所にあらず、甚大なる希望を懷きて死すべき時は立派に死に給へ。軍籍に在るキリスト信者が戦場に於て死にたればとて、神は彼の靈を決して天国より斥け給はざるべしと小生は固く信じ候⁽³⁸⁾」

だが翌一九〇五年六月に内村は太田が健在であることを知り、「御健在を聞て悦ぶ。願くは日露一日も早く兵を息めて、君を余の家に迎ふるの快を得んことを祈り候⁽³⁹⁾」「一日千秋の感を以つて君並に他の諸勇士の凱旋を待つ⁽³⁹⁾」と書き送っている。その数カ月後に太田が無事に帰ってくると、「御無事御凱旋にて、大慶の至りに存候。今後永久、戦争なるものの起こらざらんことを祈り候⁽⁴⁰⁾」と書いている。

一九〇四年二月一日に内村が知人に送った書簡では、旅順港での海軍の勝利を知って、これが長い陸戦を招き国家の資源を極度に枯渇させてしまうことを憂慮しつつも、思わず「昔ながらの愛国心」から「隣り近所全体に聞こえるほどの大声で、「帝国万才」を三唱しました⁽⁴¹⁾」とも述べている。これについては内村も自らのなかの矛盾を自覚しているようである。また、内村に「徴兵拒否をしたい」と相談に來た青年に対して、「家族のためにも兵役には行った方がいい」と発言したこともよく知られているエピソードである。これはしばしば内村の非戦論に対する

疑問点として挙げられることが多い。だが非戦主義を抱きつつも軍事に関わることでそれ自体には反対しない内村の言動は、彼のなかでは矛盾するものではなかった。内村によれば、非戦主義者の戦死は戦争廃止に意味のあるものなのである。彼は次のように述べている。

「世はわれら非戦主義者の勧告をいれず、冷静の思想は熱情の支配するところとなりて、ついに戦争を開始するに至り、そうしてその定めし制度により、国民の義務としてわれらにも兵役を命ずるに至らんか、その時には、われらは涙をのみ、誤れる兄弟の難におもむくの思念（かんがえ）をもつて、その命に従うべきである。かくするの⁽⁴²⁾が、この悲惨なる場合においては、戦争を廃止するに至らしむる最も穩健にしてかつ最も適當なる道であると思う」

その理由について内村は以下のように考えている。すなわち、もし非戦主義の名において兵役を拒んでしまうと、人々はその者たちを命を惜しむ卑怯者だという目でしか見なくなってしまう。そしてまた、仮に兵役に就かなかったとすると、その者に代わって別の誰かが犠牲になってしまふわけであるから、そうした代わりの人をつくらないためにも自ら苦役に服従すべきだというのである。さらには、すべての罪悪は善行をもつてのみ消滅させることができるのであり、戦争は多くの非戦主義者の無残な戦死をもつてのみ廃止することができるのだと述べている。可戦論者の戦死は戦争廃止に何の意味も持たないが、戦争を忌み嫌う者が敵弾の的になって倒れ、戦場にて平和の生涯を終わるにおよんで、ここに人類の罪悪の一部分があがなわれ、世界の平和はそれだけ一步この世に近づくのだという。

「逝（ゆ）けよ、両国の平和主義者よ、行いて他人の冒さざる危険を冒せよ。行いて、なんじらの忌みきらうと

ころの戦争の犠牲となりて倒れよ。戦うも、敵を憎むなかれ。そは敵なるものは今はなんじになればなり。ただ、なんじの命ぜられし職分を尽くし、なんじの死の、贖罪（しよくざい）の死たらんことを願えよ。人はなんじを死に追いやりしも、神は天にありてなんじを待ちつつあり」⁽⁴³⁾

内村はこのような考えにたつて兵役に就くことを肯定し、また親しくしている軍人を送っていた。「非戦論者が最も善き戦士を作るとは、大なる逆説のようにには聞こゆれども、しかしながら、これは否認しがたき著明なる事実である」⁽⁴⁴⁾と彼は言う。内村は、非戦論者がその生き血をそそいで戦争の犠牲になることにより、戦争全廃の道がひらくとするのである。

このような内村の主張は、すなわち自らの命を戦争そのものの犠牲とし、殉教の一種としてささげるという意味であろう。だがそれに対しては、これまで当然さまざまな疑問が投げかけられてきた。例えば千葉眞は次のように指摘している。「非戦主義者の戦死に「戦争美」を見ようとすると内村のこの議論には、武士道的死生観が部分的に現れており、その貴き非業の死を贖罪死として美化することで、結果的に戦争を推し進める国家主義の論理に組み入れられる危険性があることは否定しがたい。彼の非戦論に内在している歴史的リアリズムの洞見はここには微塵も認めることはできず、それは一種の戦争神秘主義によって大幅に曇らされているといえよう」⁽⁴⁵⁾。また、内村は戦場で死ぬことの意味を評価しつつも、兵士が戦場で敵兵を殺すという可能性についてはほとんど考慮にいれていないように見え、その点についても批判は避けられないように思われる。

内村の軍人理解においても一つ注目すべき点は、彼は軍人に対する慰めという行為も、決して戦争そのものの是認にはならないと考えていたことである。内村は「戦時における非戦主義者の態度」と題する文章のなかで、戦争が始まるまでは全力でそれに反対を唱えるが、始まってしまったならば、平和主義者の義務と責任と目的は、平和の回

復であるという。しかしだからといって、現実には戦争を終わらせることは自分たちの力だけで容易にできるものではない。そこで自らにとつて最もふさわしい事業は、兵士やその家族たちの慰問であるという。彼は次のように述べている。

「私ども、金銭に乏しき者はもちろん世の宝をもつて多く彼ら可憐の民を慰めることはできません。しかしながら慰藉（いしゃ）は金銭の施与にのみ限りませんから、私どもは力相応の援助（たすけ）をかれらに供することができます。あるいは彼らの家事の相談相手となり、あるいはわが家の剰余品をもつて彼らの不足を補い、またある特別の場合においては、彼らに心靈上の慰藉を供して、彼らの寂寥（せきりょう）の一部を癒（い）やすこともできます。われらはこうして軍人を慰めて、べつに戦争そのものを是認するものではありません。これら無辜（むこ）の民にとりましては、戦争は天災の一種と見てもよろしいと思います。これは彼らが招いて起こったことでもなく、また好んで迎えたことでもありません。ゆえに私どもは、飢饉や海嘯の時に彼らを助けると同じ心をもつて、私どもの満腔の同情を彼らに表すことができます」⁽⁴⁶⁾

続けて内村は次のように断言している。「非戦主義はわがための主義ではありません。これは人を救うための主義であります。召集されし兵士を励まし、その遺族を慰むるがときは、これ決して非戦主義にそむくことではありません」⁽⁴⁷⁾。わざわざこのような発言をするのは、兵士への励めや励ましに対して、すでに一部から、非戦主義に矛盾するのではないかという批判があつたからではないかと推測される。だが内村は、一般の兵士やその家族たちにとって、戦争とはもはや「天災の一種」であるとし、兵士やその家族を慰めることそれ自体は決して「戦争協力」ではないと考えていた。非戦論や戦争廃絶を唱えつつも、また軍備というものに否定的でありつつも、軍人という職業やその当

人たちが平和に反する存在と見て攻撃することは決してなかったのである。

だがその一方で、軍人の存在が戦争のきっかけとなりうることを指摘するような発言もないわけではない。例えば内村は第一次大戦中、軍人は職業柄、常に戦争について議論しているので、軍人の存在する間は必ず開戦論はあるであろうとも述べている。⁽⁴⁸⁾確かに軍人は戦闘行為の主体ではある。しかし少なくとも近現代においては、戦争をするかしないかを決めるのは政府や政治家、あるいは世論や有権者であり、軍人自身に開戦の決定権があるわけではない。また一般に、軍事思想・戦略思想は決して単なる戦争の肯定ではなく、むしろ戦争の回避や抑止、また戦争被害の縮小をも狙いとする思索である。第二次大戦時の日本でもドイツでも、開戦に消極的だった軍人は少なくない。むしろ一部の文民や世論に開戦の声が大きかったのも事実である。内村が本格的に非戦論を唱え始めた日露戦争前も、明治の軍部は戦力や国力の差を冷静に見据えて、戦争はやるべきではないのではないかと考えていた。しかし一九〇三年の日露交渉直前に東大教授七名が桂太郎首相を訪れて開戦を主張する強硬な意見書を提出し、またそれを新聞で国民に発表するなどし、結果として世論を主戦論に向かわせた。そうした現実を考えれば、軍人は必ず戦争を主張し軍人が戦争と混乱の原因であるとするような見方は短絡的であるようにも思われる。

また内村は国家を一頭の動物に例えて、平和主義者を胃や腸、軍人を爪や牙に相当するものだという言い方もしている。⁽⁴⁹⁾「軍人」の対極に「平和主義者」をおいているという点だけに注目すれば、彼が軍人に対してネガティブな評価をしているような印象を受けるかもしれない。だが一方で、内村の他の議論をみていくと、彼は決して単純に軍人を平和の敵であるとは見ていないとも考えられるのである。次に、「軍人の信仰」と題されたエッセーをとおして、彼が軍人と信仰の関係をどう考えていたのかを見てみることにしたい。

五 軍人の信仰

内村は「軍人の信仰」のなかで、福音書に登場する百人隊長や使徒言行録のコルネリウスなどを挙げて、彼らはみな「福音の保護者」であったと述べている。「イエスは軍人を愛し、軍人はイエスを愛した」、そして「この異邦人、しかもこの異邦の軍人に、まれに見る篤き信仰があつた⁽⁵⁰⁾」という。そしてキリスト教の信仰は「戦闘の一種」であつて、闘志なき者には維持することのできないものであると主張している。内村によれば、「教会は軍隊の一種」である。教会は法律家や思想家の弁論会ではなく、行けと命じれば行き、来いと命じれば来る者の衆合であるという。すなわち權威の行われるところであつて、議論の行われるところではない。したがつて、現にこれまでその指導の任にあたつてきた者の多くは軍人の家に生まれた者か、あるいは軍人氣質の者であつたという。

例えば内村は、英国の説教師で日本のキリスト信者に大きな影響を与えたフレデリック・W・ロバートソンを挙げ、彼は陸軍砲兵士官の息子で、軍人の精神をもつてキリストに仕えた者であるとしている。また、イグナティウス・デ・ロヨラは周知のとおり元軍人で、「軍人が宣教師に化した者」であつた。さらに、熊本バンドの礎を築いたリロイ・ジェーンズも士官学校出身の軍人であつたし、内村とも関係の深いW・S・クラークも南北戦争を戦つて大佐の階級で退役した軍人であつた。感化力の極めて大きかつた福音伝道者の多くは「自身軍職を身に帯びし人」だったのである。日本にプロテスタントが伝えられるやこれを受け入れたのは鍋島の臣であつた村田若狭という武士であつたし、その後の新島襄、本多庸一らも同じく武士の家に生まれたものであつた。新渡戸稲造や内村自身もそうであろう。内村によれば、「すなわち日本にあつても、福音は軍人によりて伝えられ、軍人によりて受けられた⁽⁵¹⁾」のである。内村は次のようにいう。

「イエスは平和の君であるが、その部下として忠実なる軍人を求めたもう。そして軍人が福音の戦士と化せし時に、最も有力なる平和の使者となるのである」⁽⁵²⁾。

なぜならば、福音は簡単・明瞭であり、その多くは命令によっておこなわれることだからだという。命令に対して「何ゆえに」と問題を設けるようなものではない。「キリスト教は哲学的宗教なりと称し、まずその哲学的根底をきわめて、しかる後に立つという者のごときは、とうていイエスの忠実なる弟子たるあたわざる者である」⁽³³⁾とも述べている。彼によれば、「君命これ従うのほか何事をも知らざる心をもってイエスに臨んでこそ、彼がまことに神の子、人類の王、わが全身をささげて誤らざる者であることが判明する」⁽³⁴⁾のである。

そしてここでも確認されるべきなのは、こうした内村の軍人に肯定的な議論は、日露戦争も第一次世界大戦も終わった一九二〇年代半ば、すなわち、単なる道徳や文明の進歩に信頼した非戦論ではなく、キリスト再臨信仰に基づいた非戦論を唱えていた時期に発表されたということである。確かにこのエッセーは、マタイ福音書八章、ルカ福音書七章、使徒言行録一〇章、という聖書の限られた箇所を念頭に論じられた短い文章ではある。またここで言われている「軍人」は、「戦闘をおこなう」という性格に対してよりも、むしろ「服従する」という性格に注目したうえでの評価であるようにも思われる。ところがここでは、「軍隊は必ずしも圧制の道具ではない。よくこれを使用して、平和は確立され支持せらる」⁽³⁵⁾とも述べられるなど、日清戦争以前の可戦論に舞い戻ったかのような発言さえ加えられている。少なくともこの文章のなかでは、軍人や軍隊の存在を戦争の原因や悪の根源であると見なすような批判的論調は一切見られない。

内村は「余が非戦論者となりし由来」というエッセーで、自らがかつては可戦論者であった理由として、自分は武士の家に生まれたものであり戦争は先祖伝来の職業であったからだと述べている。⁽³⁶⁾彼が戦争には絶対に反対しながらも、軍人たちと親しく交わり、軍人の信仰にも肯定的であった理由のひとつとして、やはり武士の末裔という自らの生い立ちから「軍人」を武士の延長線上において捉え、彼らに強いシンパシーを持ち続けたことも挙げられるであろう。

ただし二〇世紀初頭は戦争形態が激変し、その規模も急激に拡大した時期でもあり、戦場で軍人たちのおかれていた現実とは極めて過酷なものであった。武力衝突は「産業化戦争」となり、ナシヨナリズムが叫ばれ、いわゆる「総力戦」の様相を持ち始めつつあったこの時代に、はたして「武士」と「軍人」をパラレルに捉えることが妥当であったかどうかについてはあらためて検討が必要であろう。このエッセーの最後で内村は、日本の武士道は福音を接ぎ木するのにもよい台木であり、武士道の衰退は福音のためにも嘆かわしいことだとしている。彼の武士道論の背後には、見てきたような「軍人」に対する肯定的な姿勢がある。そしてまたその軍人観をさらに深く理解するためには、あらためて彼の武士道論を考察することも課題の一つとなるであろう。

六　むすび

戦争廃絶を主張した内村のなかに、軍人そのものに対する無条件の批判、あるいは嫌悪はほとんど見られない。見てきたように、彼は徴兵された一般市民のみならず、職業軍人とも親しく交流しており、その態度は大変暖かいものであった。もちろん可戦論を唱える軍人には批判的であったが、問題はあくまで可戦論であって軍人そのものではない。

繰り返しになるが、内村は戦争を「天災の一種」であるとも捉えていた。確かに戦争は人間によってなされるものである。しかしそれにいたる道筋や過程は、すべてが人の理性でコントロールできるものではない。戦争は地理的環境、政治、経済、宗教、イデオロギー、歴史的背景などが複雑に絡み合い、さらに利害、プライド、不信、誤解、差別などが錯綜して生起する、巨大な社会のうねりである。必ずしも明白な悪意によって生じるものではない。戦争はもはや人間的解決の可能性を超えたものであり、本来的な罪と悪の集約であるからこそ、内村は平和の到来を神の手に委ねたのである。

内村は、「罪のこの世の続く限り」、軍隊を「全廃せらるる時の来たることを考えることはできない」と言う。だがこれは決して悲観的な現実認識によるものではない。むしろ、平和は人間の手によってではなく、神の手によってのみ、キリストの再臨によってのみ、可能になるという信仰に基づいた認識として捉えられねばならない。そしてそのような境地では、軍人といえども、戦争に巻き込まれた存在である。軍人を否定し彼らを社会から排除しようとするのが平和主義であるならば、それはすなわち人間の根源的な罪と悪を忘れ、自らの手によって平和が可能になるという傲慢な姿勢に他ならない。そこでは神への信頼もキリスト再臨への信仰も不要になるだろう。真に戦争の悪と悲惨さを認識すればこそ、軍人にも同情と哀れみの気持ちを持たざるを得なくなるのであり、戦争に反対するからといって軍人という存在自体に対して冷淡になることはありえない。だから現にこの世に存在している軍人への慰藉も、内村にとっては極めて当たり前のことであり、軍人も「真の信仰によって潔めらるるの必要あるは言うまでもなし」、なのである。

戦争への批判は、しばしば戦闘の担い手である軍人への批判にもなりやすい。だが「戦争」とは大きな社会的事象であり、時には政治的な概念でさえあるのに対して、「軍人」は個別の人間ないしは職業であって、それら二つは必ずしも同一の線上で議論、評価できる対象ではない。内村が「戦争」と「軍人」を混同せずに思索・生活することができたのは、彼の非戦論が単なる情緒的な、もっぱら人間の側を向いた平和主義ではなく、罪の自覚と真摯なキリスト再臨信仰に基づき、あくまで神の側を向いた平和主義だったからではないだろうか。神の前ではいかなる人間も同じ地平に立つ存在であるからこそ、戦闘の主体である軍人に対してさえも、他の人々に対するのと同じように接することができたのではないかと思われる。

戦争が「悪」なのは自明である。だがそれでも世界には、今も現に膨大な数の軍人がいる。「平和」という抽象的な概念だけでなく、「軍人」という具体的な存在を信仰との関係でどう捉えるべきかを考えることも、キリスト教倫

理の課題の一つであるだろう。

註

- (1) 『ガリラヤの道』一九二五年（『内村鑑三聖書注解全集』第一五卷、教文館、一九六一年、一二七・一二八頁）。
- (2) 内村と軍人の関係に言及している先行研究としては、以下のものを参照。峯崎康忠『軍人伝道に関する研究——日本OCCUの源流——』（ヨルダン社、一九八〇年）、田中浩司「内村鑑三と理想的宣教師Estella Finch——異文化におけるキリスト教宣教の一つのあり方——」（『防衛大学校紀要人文科学分冊』九〇号、防衛大学校、二〇〇五年）、山中稔「軍人伝道を支援した内村鑑三——日々の記録にみる一側面——」（『キリスト新聞』二〇一〇年二月二一日、二五日）。
- (3) 「過去二十年」『聖書之研究』一九一四年九月（『内村鑑三信仰著作全集 一九』教文館、一九六四年、一一五頁）。
- (4) 同書、一一六頁。
- (5) 「戦争廃止論」『万朝報』一九〇三年六月（『内村鑑三信仰著作全集 二二』二七頁）。
- (6) 「近時における非戦論」『聖書之研究』一九〇四年八月（『内村鑑三信仰著作全集 二二』教文館、一九六二年、一一〇頁）。
- (7) 「非戦論の原理」『聖書之研究』一九〇八年八月（『内村鑑三信仰著作全集 二二』一〇〇頁）。
- (8) 山本泰次郎『内村鑑三の根本問題』（教文館、一九六八年）六六頁。
- (9) 同書、六八頁。
- (10) 同書、七二頁。
- (11) 「戦争廃止に関する聖書の明示」『聖書之研究』一九一七年七月（『内村鑑三信仰著作全集 二二』一一五頁）。

- (12) 「連盟と暗黒」『聖書之研究』一九一九年五月（『内村鑑三信仰著作全集 一二』三二〇頁）。
- (13) 「戦争と伝道」『聖書之研究』一九一七年二月（『内村鑑三信仰著作全集 一二』一一九・一二〇頁）。
- (14) 「戦争廃止に関する聖書の明示」『聖書之研究』一九一七年七月（『内村鑑三信仰著作全集 一二』一一六・一七頁）。
- (15) 同書、一一八頁。
- (16) 「世界の平和はいかにして来たるか」『聖書之研究』一九一八年四月（『内村鑑三信仰著作全集 一三』教文館、一九六二年、一二一・一二二頁）。
- (17) 「謹告二件」『聖書之研究』一九一四年一月（『内村鑑三信仰著作全集 一二』教文館、一九六二年、二三〇頁）。
- (18) 「罪界の時事」『聖書之研究』一九〇三年一月（『内村鑑三信仰著作全集 一二』四五・四六頁）。
- (19) 内村の非戦論については、以下の文献などを参照。千葉眞「内村鑑三―非戦の論理とその特質―」（『年報政治学』通号一九九二、日本政治学会、一九九二年）、内田芳明『現代に生きる内村鑑三』（岩波書店、一九九一年）、鶴沼裕子「内村鑑三における信仰と倫理―戦争と平和の問題をめぐって―」（『聖学院大学総合研究所紀要』四六巻、二〇〇九年）、宮田光雄「宗教と平和―内村鑑三の非戦思想―」（『理想』四九〇号、一九七四年）。
- (20) 峯崎康忠、前掲書、一二頁。内村と伝道義会およびフィンチとの関係については、次の新聞記事も参照。山中稔「軍人伝道を支援した内村鑑三―日々の記録にみる一側面―」（『キリスト新聞』二〇一〇年二月一日、二五頁）。
- (21) 堤健男『クリスチャン海軍生徒―海軍機関学校と日本陸海軍伝道義会―』（私家版、一九八七年）四二頁。
- (22) 田中浩司、前掲論文を参照。
- (23) 一九〇五年六月一六日の書簡（『内村鑑三日記書簡全集 六』教文館、一九六四年、一〇二頁）。
- (24) 一九一八年二月一三日の日記（『内村鑑三日記書簡全集 一』教文館、一九六四年、四五頁）。

- (25) 一九一九年一月五日の日記（同書、一八〇頁）。
- (26) 一九二二年二月二日の日記（『内村鑑三日記書簡全集 二』教文館、一九六四年、一四頁）。
- (27) 一九二四年六月二日の日記（『内村鑑三日記書簡全集 三』教文館、一九六四年、五九頁）。
- (28) 田中浩司、前掲論文、三九頁。
- (29) 堤健男、前掲書、一六頁。
- (30) 「無抵抗主義の根拠」『聖書之研究』一九〇七年八月（『内村鑑三聖書注解全集』第八卷教文館、一九六〇年、二〇二頁）。
- (31) 一九一九年六月七日の日記（『内村鑑三日記書簡全集 一』一二一頁）。
- (32) 一九二三年九月六日の日記（『内村鑑三日記書簡全集 二』三五一頁）。
- (33) 一九二三年九月二日の日記（同書、三五六頁）。
- (34) 一九二八年一月二八日の日記（『内村鑑三日記書簡全集 四』教文館、一九六五年、二四四頁）。
- (35) 一九二八年二月三日の日記（同書、二四六頁）。
- (36) 一九二八年二月三日の日記（同書、二四六頁）。
- (37) 一九二五年五月二日の日記（『内村鑑三日記書簡全集 三』一七六頁）。
- (38) 一九〇四年二月二日の書簡（『内村鑑三日記書簡全集 六』八〇頁）。
- (39) 一九〇五年六月一六日の書簡（同書、一〇二頁）。
- (40) 一九〇五年一〇月五日の書簡（同書、一一一頁）。
- (41) 一九〇四年二月一日の書簡（同書、七九頁）。
- (42) 「非戦主義者の戦死」『聖書之研究』一九〇四年一〇月（『内村鑑三信仰著作全集 二二』五九頁）。

- (43) 同書、六〇頁。
- (44) 同書、六一頁。
- (45) 千葉眞、前掲論文、一〇七・一〇八頁。
- (46) 「戦時における非戦主義者の態度」『聖書之研究』一九〇四年四月（『内村鑑三信仰著作全集 二二』五〇・五一頁）。
- (47) 同書、五一頁。
- (48) 「教会と聖書」『聖書之研究』一九一五年七月（『内村鑑三信仰著作全集 一一』教文館、一九六二年、二〇一・二〇二頁）。
- (49) 「戦時における非戦主義者の態度」『聖書之研究』一九〇四年四月（『内村鑑三信仰著作全集 二二』、五三頁）。
- (50) 『ガリラヤの道』一九二五年（『内村鑑三聖書注解全集』第一五卷、一二五頁）。
- (51) 同書、一二七頁。
- (52) 同書、一二七・一二八頁。
- (53) 同書、一二八頁。
- (54) 同書、一二九頁。
- (55) 同書、一二五頁。
- (56) 「余が非戦論者となりし由来」『聖書之研究』一九〇四年九月（『内村鑑三信仰著作全集 二二』、八九頁）。